

実施主体	藤沢市教育委員会
------	----------

平成19年度国際教育推進プラン報告書

1 実施主体

神奈川県 藤沢市教育委員会

2 実践学校名

中核校 藤沢市立湘南台小学校

協力校 藤沢市立六会小学校、藤沢市立富士見台小学校

藤沢市立長後小学校、藤沢市立湘南台中学校

藤沢市立高倉中学校、藤沢市立六会中学校

神奈川県立湘南台高等学校、神奈川県立藤沢総合高等学校

3 連携先NPO法人等名

・慶應義塾大学総合政策学部ボランティア団体 JUMP

・文教大学 ボランティア団体 HOP

4 平成19年度の実践活動

(1) 取組内容

①「宇宙船地球号カリキュラム」の開発

中核校の湘南台小学校では、1992年、日本語指導教室を設置した当時から、外国籍児童の国や言葉を理解し、多様な価値観を認め合おう、という取組が行われてきた。日本語指導教室開設当初から、学習支援をしていた慶應義塾大学のボランティア団体JUMPの学生が、2001年からは、担任と協働し、一般教室で国際理解のための授業を始めた。2006年からは文教大学の学生ボランティア団体HOPの学生も加わり、総合的な学習の時間を中心に、国際教育の授業案や教材を作成し、実践してきている。今年度新たに、カリキュラムコーディネーターの協力を得て、国語・社会・音楽・家庭等の教科と関連づけたカリキュラム開発を行った。

今年度は、全校で国際教育の授業に取り組み、どの学年でどのような内容を行うのが相応しいかという視点から、これまで実践した教材やアクティビティを整理した。特に、外国籍等児童が授業の中で活躍する場面を設定し、一方的に支援されるのではなく、豊かな異文化を持ってきてくれる存在として尊重され、共生について考えていかれるような内容を多く取り入れた授業を行った。

また、協力校においても、藤沢市の国際理解協力員とティームティーチングで、協力員の出身国(ブラジル)の地理や食文化などをクイズ形式で扱ったり、世界のことばを扱う授業を行った。

今後は、更に、小・中・高一貫した取組ができるよう、系統性のあるカリキュラム開発へとつなげていきたいと考えている。

○2007年度（平成19年度）における授業内容（湘南台小学校）

学年 ジャンル	1 年	2 年	3 年
文化		<ul style="list-style-type: none"> ・ミトトの発祥地はどこ？ ・色々な国の歌 ・世界の国旗 ・世界の食べ物 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界のお話し ・絵本「せかいの人々」 ・民族衣装 ・世界の挨拶について調べよう
ワークショップ		<ul style="list-style-type: none"> ・動物の鳴き声クイズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国と言えば…(世界地図) ・いいとこさがし ・世界のあいさつカルタを作ろう
言語	<ul style="list-style-type: none"> ・フルーツバスケット(日本語) ・きらきら星(ス語) ・フルーツバスケット(ス語) 	<ul style="list-style-type: none"> ・フルーツバスケット(ポ語) ・あいさつ(ポ語) ・フルーツバスケット(英語) ・色々な言葉であいさつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の名前(英語) ・あいさつの歌(英・ス語) ・英会話(Do you have ?) ・フルーツバスケット(ス語)
学年 ジャンル	4 年	5 年	6 年
文化	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーと日本のイメージ ・台湾の文化 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーと日本のイメージ ・台湾の文化 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の人々との繋がりを深めよう ・台湾の歴史や文化
ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの出会い ・いいとこ探し ・バーンガ ・行ってみたい外国へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・バルンバ人調査隊 ・バーンガ ・フォトランゲージ ・ペルーの歴史・地理など 	<ul style="list-style-type: none"> ・いいとこさがし ・レヌカの学び ・バルンバ人調査隊
言語	<ul style="list-style-type: none"> ・スペイン語の挨拶 ・フルーツバスケット(ス・ポ語) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スペイン語で話そう あいさつ、数字、色、 ～はどこ？時間、感情など 	<ul style="list-style-type: none"> ・スペイン語
交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーからの手紙 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーからの手紙 ・ビデオレター(ヒデヨノグチ校) 	

②外国の学校との交流

2004年から、総合的な学習の時間でペルーの日系人学校ラ・ユニオン校との交流が始まり、2005年5月には同校の児童が来日して、湘南台地区でホームステイや日本の学校の授業を体験した。その後も、ビデオレターや手紙の交換などを行ない、交流を続けている。日本語指導教室にLANを設置して、児童が直接交流できるようなIT環境を整えつつある。さらに、ラ・ユニオン校との交流から発展し、同じくペルー日系人学校であるヒデヨノグチ校とビクトリア校の子ども

達とも交流している。

2008年6月にはヒデヨノグチ校の児童生徒十数名が、湘南台地区との交流と、野口英世博士の故郷である福島県猪苗代町訪問を目的に、来日することになった。それを受けてPTAの「ヒデヨノグチ校受け入れ委員会」と児童による「ペルー子ども委員会」を立ち上げ、受け入れの体制作りを進めている。来日した際に交流の中心となる5年生を中心に、総合的な学習の時間に保護者やボランティアをゲストティーチャーに迎えて、実際に会った時に使えるよう、スペイン語を勉強したり、ペルーについても学習を深めた。

地域での受け入れのために地域や保護者のボランティアによるスペイン語の講習会を6回行った。多くの人に参加できるように、曜日や時間を変えて、3回ずつ同じ内容を行った。今後も10回が予定されている。

さらに、ヒデヨノグチ校は野口英世博士の故郷である福島県猪苗代町も訪問するので、湘南台地区と猪苗代町が共同で受け入れる体制を作り、ペルーを軸にして、猪苗代町・湘南台の三者の児童生徒が相互交流するために、連絡を取り合っている。

③日本の学校紹介ビデオ『¡Vamos a Shonandai!』の制作

日本の学校生活を理解してもらうために、1994年にJUMPと藤沢市教育委員会が協働して、「VIVA!～日本の小学校の紹介」を作成した。前作では、小学校の1日の様子をビデオ化したが、現在、入学手続き・学校行事(必要なもの)等、外国籍児童の保護者のための学校紹介ビデオを制作している。コーディネーターは、台本の作成、撮影の手配、業者との打合せなどを行い、制作を進めている。

日本語ができない外国籍の児童や保護者に対して、入学説明会や懇談会等で活用するために完成版を市内のすべての小中学校に配布予定である。

④外国籍等児童生徒のための日本語指導教材の開発

教材作成コーディネーターが週1回、日本語指導教室で直接指導する中で、一人ひとりに適した教材開発を行った。日本語習得の中でも、国語の教科書を理解することは大変難しい。言語のみならず文化的な背景が異なる学習者に内容を理解させるために、対話文方式による教材を作り使用したところ、大変効果的であったので、他の単元についても順次作成している。

⑤地域や学校間の連携

湘南台地域では、以前から地域や商店街の行事でブラジルのサンバや、ペルーのフォルクローレを取り入れるなど、地域の外国人との共生について考えている。また、湘南台に隣接する高倉地区にある東勝寺では、外国籍住民を講師としたスペイン語・ポルトガル語学習会や、外国籍住民を対象にした日本語の「語学学習会」を定期的で開催したり、「月見の会」「忘年会」などを開いて、

外国人と日本人が交流できる場を提供したりしている。今年度も、それらの行事を通して、外国人住民と日本人の交流が深まった。また、前述のように、国際教育の授業に地域の人々が参加したり、外国籍保護者と日本人の保護者がPTAや地域の行事を通して交流することで、学校と地域の連携が深まってきた。

近年、日本に住む外国人は定住化の傾向にあり、子どもを日本の高校・大学へと進学させたいと願う親が多いが、現実には、学習言語が公立高校合格レベルまで達する生徒は少なく、進学しても高校の授業についていくのに困難をきたし、中学校や高校の段階で不登校になったり退学したりするケースも少なくない。外国籍等児童生徒が日本の学校で学び続けるためには、小・中・高の教員が連携して、児童生徒や保護者を支援したり、子ども同士が支援したりする体制作りが必要である。各学校が抱えている課題を把握するとともに、どのように連携していくかを考えるために、協力校コーディネーターが各学校を訪問し、校長や国際教室担当者と話し合いを重ねてきた。

冬休みには地域コーディネーターの協力を得てウィンタースクールを開催したところ、外国籍等児童生徒延べ39名が参加した。最終日には、保護者向けの日本語教室も開催し、地域のボランティアが指導にあたった。その中で、外国人住民としての悩みなどについても話し合いができ、有意義な時間を過ごすことができた。

藤沢市では地域・学校・家庭の三者が連携して子どもたちを育てるための活動が活発に行われている。その一つとして、地域でのイベント「フェスタとらいあんぐる」が毎年開かれているが、今年度は、日本人と外国籍の児童生徒と一緒にフォルクローレを踊る場を作り、地域の人たちに対して、共生の街づくりを訴えた。

⑥各種研修会及び研究会への参加

- ・国際理解教育研修会（武蔵野交流協会）
- ・豊橋市岩田小学校サマースクール及び豊橋市教育委員会
- ・在日外国人教育問題研究会（愛知学院大学）
- ・四日市市西笹川中学校・笹川東小学校・笹川西小学校（プレクラス・国際教室）
- ・教育シンポジウム2007（豊田市）

⑦講演会開催

- ・『「移動する子どもたち」と日本語教育』
講師 早稲田大学大学院教育研究科 川上 郁雄教授
- ・「少年院における外国人少年に対する教育について」
講師 久里浜少年院 主席専門官 柴田克明氏 専門官 杉藤友仁氏

⑧教員を対象としたワークショップの実施

外国籍等児童生徒の状況や日本語指導教室・国際教室の状況を広く市内の教員に知ってもらうとともに、国際教育の実践力を高めるために、教育委員会と国際教育推進地域連絡協議会のメンバーが協力してワークショップを2回行った。

未知の「バルンバ人」がどんな人たちかを探るために、「ルンバ（はい）」「バル（いいえ）」しか話せないバルンバ人に4～5人のグループで様々な質問をする「バルンバ人調査隊」というアクティビティを行った。異なる文化を持つ人と接するとき自分がどのような態度を取るのか、ということを経験し、異文化間コミュニケーションの難しさや相手への気遣いの大切さを実感するとともに、自らの中にある差別や偏見と向き合うという目的を果たすことができた。

事後の感想でも「相手を認めることの大切さを改めて実感した。」「自分のクラスでもやってみよう」というものが多数あった。

(2) 取組内容の成果

宇宙船地球号カリキュラムの作成のために、互いの授業を参観したり、研究会を行ったりする中で、カリキュラム編成の方向性が明確になってきた。「多文化社会の中で、互いに認め合い育ち合う子どもたちの育成をめざして」という研究テーマにあるように、文化的背景の異なる児童が多く在籍する湘南台小学校の独自性を活かしたカリキュラム作成が進められた。

JUMPやHOPの学生以外にも、外国籍の保護者や地域のボランティアにゲストティーチャーとして参加してもらい、外国籍児童の出身国であるブラジルやペルーの文化や言語を理解する授業を行った。ペルー・アルゼンチン国籍の児童は、日本人児童が自分の母語を学ぶことで、自分を認めてもらったという喜びを表していた。日本人児童も自分たちと外国との関係を学びながら、同じ教室の中にいる外国籍児童を理解し、認めることで互いに共生の道筋を探っていく基盤ができた。また、「コミュニケーションをとるにはまずどんなことでも我慢して様子を伺うことが大切だと思った。」「いきなり質問しないで、あいさつから仲良くなった方がよいと思った。」など、異文化間コミュニケーションで最も大切なことについて考えられる児童が増えてきた。

外国籍等児童に対する指導においても、一人ひとりの興味や学習スタイルに応じた教材開発により、日本語学習に対する意欲が高まり、自信を深めることができた。

(3) 来年度の課題

今年度からコーディネーターを活用して国際教育推進プランを進めてきたが、協力校における聞き取りから、国際教育に対して、学校間、教員間にかなりの温度差が有ることが指摘された。第3回の国際教育推進地域連絡協議会で、中学校の教員から「中学校に入ると、外国籍であるということを隠したがる生徒がいる。」

「小学校でのカリキュラムを中学校の中で実践する難しさを感じている。」という指摘があった。宇宙船地球号カリキュラムの系統化を進めるとともに、他校で実践するために、教材を提供するだけでなく、発達段階に合わせたカリキュラム作りや、指導できる人材を派遣することも必要である。また、各学校で国際教育の研修をすることも考えられ、コーディネーターが各学校のニーズを理解して連絡調整をする必要がある。

今年6月にはいよいよヒデヨノグチ校の児童生徒が来日し、湘南台小学校の児童と交流することになっているが、交流の成果をその後どのように生かしていくか、ということも課題である。児童が経験を通して学んだことを意識化したり他の児童と共有化したりして、次の学びにつなげることが大切である。

外国籍保護者が学校や地域の行事を通して、学校や他の保護者との信頼関係を築くことができている。その結果、相談相手として、学校以外のことも学校に頼ってくるということも多く、教員の負担が増大している。ウィンタースクールで地域の人々が保護者に対して情報を提供したり、相談にのったりする機会があり大変有効であった。そのような機会を持つことによって、外国人住民が地域の中で孤立することなく、地域の一員として暮らしていく環境づくりができ、「外国人市民と共に生きる藤沢」の具現化を図ることができる。来年度は地域コーディネーターや協力校コーディネーターを活用して、外国人保護者や外国人住民と連携を深める取組みを行っていきたい。